

令和六年度

岡山白陵高等学校入学試験問題

国語

受験番号	
------	--

注意

- 一、時間は六〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があったら、まず問題が一ページから二〇ページまで順になっているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に数えます。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

① ^(注)ゼミの男子学生が髭をテーマに卒業論文を書きました。内容は日本や西洋における髭の社会史をまとめたものですが、彼にとって卒業論は自分の髭への『鎮魂歌』でした。彼は、ゼミにはよく手入れされた黒々とした髭を蓄えて現れました。ゼミだけでなく大学の日常も髭を蓄えた姿は特に違和感もなく、何の②シショウもなく彼は過ごしていました。しかし、大学を卒業し社会人になるタイミングで、彼は見事な髭に別れを告げなければならなかったのです。企業の就職面接で彼は卒業論文のことを聞かれ、髭に対する問題関心を語り、髭が持っていた社会的意義なども語ったのだと思います。彼は内定をとり、採用されました。彼の人物を評価し、大学での社会学の学びや卒業論文の内容が良かったからこそ、採用されたのだと、私は思います。ただ、彼曰く、最後に面接を担当していた人から「うちの会社に來ることになったら、髭はきれいに剃ってくださいね」と□を刺されたそうです。

髭をたくわえているからといって、それだけでその人物の人間性や能力などはわからないでしょう。髭のあるなしで、その人物を理解しきることなどできないはずで、なぜ彼は髭をきれいに剃ってくださいと注意されたのでしょうか。

③ うちの会社に勤めるとすれば、それはふさわしくない。企業を構成する一員になるのだから、企業イメージに④テ
イショクしないように外見も整えるべきだ。お客様に不快な印象をあたえてしまう危険性がある。うちの会社は食品を扱っているのだから、常に清潔感が社員には必須だなど、さまざまな「理由」が考えられるでしょう。ただ「理由」のいずれをとっても、髭をはやしていることが、人間としてダメな証拠であり、⑤ケツカンがある証拠だといった私たちの「内実」に言及するものにはなっていません。

髭を例にとつて、少しお話ししましたが、こうした「理由」が意味を持つ背景には、私たちが日常さまざまな場面で他者とやりとりする場合、外見を重要な手がかりとして、他者を判断しているという事実があるからです。日常生活世界を解読した社会学者A・シュツツによれば、私たちは普段⑥「類型」に準拠して他者を理解し、「類型」は私たちがそれまで蓄積してきた「知識在庫」に依存しています。たとえば先の男子学生が卒業して社会に出ると「サラリ

「マン」となります。「サラリーマン」という「類型」は、アイロンが効いたしわのないワイシャツに興味のいいネクタイを締め、落ち着いた色のスーツを着て、にこやかにお客様に対応するといった実際の場面に即応した常識的知ら構成され、そのほとんどが外見、見た目に関連したものと云えます。より外見に徹底した「類型」といえば、「就活する大学生」を思い出します。個々の学生がどのような人間性を持ち、どのような思想をもっているのかなど、「内実」は一切関わりなく、「就活スーツ」に身を固め、清潔な髪形に整えた瞬間、彼らは「就活する大学生」に変身してしまします。

人間は外見や見かけではなく、その中身が大事だ、という考えを否定する人はまずいないでしょう。そうでありながら同時に私たちは普段、いちいち目の前にいる他者の「なかみ」や「こころ」を気にして、生きていくわけではありません。他者の「内実」ではなく、他者の「外見」をもとにして、その場その時に応じて、目の前の相手が何者であり、どのように対応すれば適切であるかを瞬時のうちに判断し、実践しているのです。だからこそ、外見を考えることは、日常における他者との出会いや他者理解を考えるうえで、とても重要な営みだと言えるでしょう。「たかが外見、されど外見」なのです。

「されど外見」を考えると、私たちは普段、他者とどのように向きあっているのかをじっくりと見つめる必要があります。そしてこれは、ゴフマンという一風変わった社会学者が生涯テーマとした「共生Ⅱ他者とともに在ること」を考え、そのありようを解説する営みと密接に関連しています。ゴフマンは、人間が他者と共にいる営みや複数の人間からできる集まりには、それ自体固有の秩序がつくられ維持されているという事実を明らかにしています。「相互行為秩序(the interaction order)」というものです。

たとえば、私たちは③電車に乗っている時に、どのような秩序を維持しながら過ごしているのでしょうか。私がまず思いつくのは「他者はじっとみつめない」というルールです。どんなに目の前の座席に座っている人が魅力的であろうと私はその人をじっと見つめたりはしません。でもやはり気になる時は、その人だけを注視するのではなく、他の光景も眺めているふりをしながら、それとなく見るでしょう。ゴフマンの言葉を借りれば、それは「焦点をあわせない(unfocused)」見方であり、こうした秩序が維持されているのは「焦点をあわせない人々の集まり」であり、電車のような公共的な空間で④テンケイ的にみられる現象です。つまり私に限らず乗り合わせた多くの人は、電車の中で

は、特定の誰かに焦点をあわせないので、焦点をぼかしながら、周囲の乗客の姿や様子を見るときも全く見ていないのです。さらに言えば私たちは、他の乗客との「距離」を絶妙に保ちながら、自分の場所を維持しつつスマホに熱中したり音楽を聴いたり本を読んだりしています。ゴフマンに言わせれば、新聞や週刊誌や本は、他者との「距離」をとり、「距離」を保っていること、言い換えれば自分とは他者に対して関心はないし、他者という存在へ関与するつもりもないことを周囲の他者に表示するための「道具」なのです。もちろん今はスマホこそ最適な「道具」です。ただこうした視線の取り方や「道具」が通常に機能して電車内の秩序が維持されるとしても、それが危うくなる状況はいくらでも起こり得ます。

満員電車に乗って、私はいつも気になり、どうしようか困ってしまうことがあります。それは隣に立っている人や席に座っている人が熱中するスマホの画面が「見えてしまう」ことです。見たくなければ目を閉じればいいだけです。満員で身動きもままならないとき、目を閉じ続けると不安定な状態になるし、さりとて他に視線を移そうとすれば、それでも別のスマホの画面が見えてしまいます。見たくもないものが、まさに「見えてしまう」のです。

④でもなぜ私は困ってしまうのでしょうか。先に述べたようにスマホは使用している人にとって、満員電車という人間が充満した異様な空間で、自分の世界に閉じこもることができる有効な道具です。それは同時に他者に対して関心もないし関与もしないことを示す道具でもあります。イヤホンで音楽を聴き、スマホの画面に目を落としてゲームやLINEのやりとりに集中している姿。それは周囲の世界や外界に対して耳も目も遮断し、自分だけの世界に集中している姿を周囲に表示していることとなります。「表示する」と書いたのは、もちろんスマホに熱中するとしても、その人は完全に他の乗客や外界の音や様子を遮断しているのではなく、聞こうと思えば聞けるし、見ようと思えば見えるからであり、そうした外界との繋がり方を意味しています。

さきほど電車内で人々が適切に「距離」を保つことが電車の秩序にとって重要だと述べましたが、満員電車のように「距離」すら保つことが困難な場合、私たちはどのようなようにして自分を守り、自分と他者との繋がりを維持しようとするのでしょうか。ゴフマンの発想を借りて、私はこう考えます。

私たちは、自分を守る「膜」とでもいえるものを持っています。それは状況によって堅牢な「殻」となるかもしれませんが、薄く、破れやすく、誰の目にも見えない透明な「膜」です。そして満員電車のように人間が過剰に密集し

てしまうとき、当然「距離」の維持は難しく、さらに「膜」さえもお互いに触れ合い、擦りあわせることで、破れてしまう危険に私たちはさらされます。そのような状態のなか、私たちは、スマホなど使える「道具」を駆使して、互いの「膜」を破る危険を回避できるよう細心の注意を払っているのです。

私が困ってしまうのは、隣の他者の「膜」をなんとか破らないように注意を払い、その場でいろいろとふるまっても、「膜」の向こうにある他者の世界が「見えてしまう」からです。LINEのやりとりや個人で検索している情報やゲームの様子など、別に私は見たくありません。結果として隣の人が懸命に維持しようとしている「自分だけの世界」を「侵犯」してしまう危うさを感じるからなのです。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないこと。これこそ、私たちが日常しっかりと守っている最大の儀礼エチケットと言えるでしょう。そしてこの儀礼を行使することに外見が密接に関連しています。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないという儀礼は、さらに私たちがその場そのときに応じて適切に自分の「外見」を整えることで達成されます。

たとえば私は、電車で空いている席を見つけると、座る前に必ず「すみません」と両側に座っている人に声をかけるか片手を少し前に出して「これから私がそこに座りますよ」という意思表示をします。両側の人のコートや上着の裾を尻で踏まないように気をつけながら座り、リュックは両腕で覆うようにして抱え、膝の上でしっかりと安定させます。ここまですれば、自分の「膜」はしっかりと守れるし、両側の人の「膜」にも触れないし、私的世界にも「侵犯」する危険性はなく、ほぼ完璧な「乗客としての外見」を私がつくりあげることができます。そしてこうした外見をつくりあげた後で、今日の講義で使えそうな面白いネタはないかと、どこに焦点をあわせることもなく、乗客の様子を細かく観察しています。

(好井裕明『他者を感じる社会学』による)

(注)ゼミ——大学における演習形式の授業。ゼミナールの略。

問1 〓線部㉑㉒のカタカナを漢字に直せ。

問2 〓線部の□に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 水 イ 影 ウ 釘^{くぎ} エ 棹^{さお} オ 魔

問3 〓線部①「彼にとって卒論は自分の髭への『鎮魂歌』でした」とあるが、どうということか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 髭の社会的意義にふれた卒論など、今から社会に出る自分にとっては現実から遊離した絵空事だと思え、以後、卒論の存在は現実逃避しがちな弱い自分への戒めとなったということ。

イ 企業の就職面接で面接官から卒論について聞かれた際、髭に対する問題関心を熱く語ったことで、学生の人物としての評価とともに、卒論の内容が高く評価されたということ。

ウ 自ら髭を蓄えるにとどまらず髭への思いが高じて卒論のテーマともなり、いよいよ「髭」への思いを強めた彼にとって、この卒論が学業の記念すべき集大成となったということ。

エ 髭への愛情やこだわりをもとに書かれた卒論が会社からは高い評価を受け、結果として採用されるに至ったが、かえってそのことが自分の髭との別れをもたらしたということ。

オ 髭をはやしていることは人間としてダメな証拠だという古くからの固定観念を覆そうと始めた卒論の執筆が、世の中の偏った風潮を考えるきっかけになったということ。

問 4 線部②「『類型』」を説明した次の文の空欄に、本文中から十五字以内の言葉を抜き出して入れ、説明を完成させよ。

「類型」とは、十五字以内をもとに、目の前の相手は何者であるかを瞬時に判断するためにつくられた、個々人に内在する「ひな形」のこと。

問 5 線部③「電車に乗っている時」とあるが、この時、どのようになれば電車内の「秩序」が「維持」されるのか。次の空欄に、本文中の言葉を抜き出して入れ、説明文を完成させよ。ただし、Aは抜き出した言葉をそのまま記し、Bは抜き出した言葉の最初と最後の五字をそれぞれ答えよ。

A 十五字以内 B 五十字程度
このための「道具」が通常に機能すれば、電車内の秩序は維持される。

問 6 線部④「でもなぜ私は困ってしまうのでしょうか」とあるが、私が「困ってしまう」理由は何か。わかりやすく説明せよ。

問 7 本文中に挙げられた、男子学生の髭の例と電車に乗っている時の例を通じて、筆者は読者にどのようなことを伝えようとしているのか。わかりやすく説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

江戸の仲町の富岡八幡宮はちまんぐうでは三年に一度の本祭を明後日に控えて、神輿みこしを担ぐ稽古けいこも佳境を迎えていた。うなぎ屋「松乃井」の主人・清五郎も大の祭好きである。本祭には各町で神輿を出すのだが、彼の住む冬木町には神輿がなかった。隣町である仲町の神輿を担ぎにきている。以下はその仲町の神輿の稽古後の場面である。

揉め事が起きたのは、四半刻(注)しはんときの稽古を終えて神輿を馬(神輿の置き台)に載せたときだった。

「差すときはよう」

眉間みけんに深いしわを刻んだ清五郎が、尖った声を発しながら半吉に詰め寄った。

「中途半端なところで腕を止めてねえで、もっと思いつきり伸ばしねえ」

瓜実顔(注)うりまねがおには似合わない荒々しい口調で、清五郎は半吉に文句をつけた。

『差す』とは、両腕を上(注)うりまねがおに伸ばして、神輿を高く持ち上げることという。

建具職人の半吉は背丈が五尺二寸(約百五十八センチ)で、清五郎よりは三寸(約九センチ)低かった。

清五郎と半吉は、前後に並んで肩を入れていた。差すときの半吉の腕の伸ばし方が、清五郎は気にくわなかったのだ。

うなぎを料理しているときの清五郎は、おだやかで声を荒らげることは滅多になかった。

ところが神輿に肩を入れるなり、内に隠していた激しい気性がおもてに出た。担ぎ方が気に入らないときは、だれかれ構わずに文句をつけた。

祭本番をあさつてに控えた今朝けさは、稽古にも一段と気合いが入っている。清五郎の物言いも、刺々しげとげしさを増していた。

「なんでえ、その言い草は」

多くの者の前で文句をつけられた半吉は、肩を怒らせて三寸高い清五郎を睨みつけた。

「おれの差しにケチをつけるたあ、どこのどなたさんなんでえ」

半吉は半纏はんてんの袖そでをまくり上げた。小柄だが、腕うでつ節ふしと(a)鼻はなつ柱はしらの強さ(a)で通とっている男だ。

担かぎ手てたちがふたりを取り囲んだ。

「訊きかれりやあ答こたえるが、おれは冬木町松乃井の清五郎だ」

清五郎も負けずに腕うでまくりをした。

「(1)おめえが松乃井の入り婿野郎か」

半吉は鼻先で嗤わらった。

(注)宮元の神輿は、三基とも三尺の大型だ。控えまで加えれば、三基の神輿に千二百人の担かぎ手が群むれている。

半吉と清五郎は、今朝が初顔合わせだった。

「婿だからと、因縁いんねんをつけようてえのか」

松乃井の婿と呼ばれるのを、清五郎はなにより嫌きらった。半吉はしかも「入り婿」という言い方をした。色白の清五郎が、こめかみに青筋を浮かべた。

「因縁いんねんはつけねえが、婿なら婿らしく、しっかりと稼業に汗を流しやがれ」

半吉は清五郎に一步を詰めた。

「おめえがこうして、よその町内の神輿担かぎに出張しゅさつつてきやがるからよう。松乃井のうなぎは、女房任せだてえじゃねえか」

裂くのも焼くのも素人の女房。

客あしらいは、(注)裏店の婆ばあさん。

ひどいうなぎを食たわされた挙句くに、(b)ぞんざいな扱あいをされた客は何人もいる。その連中は、二度と松乃井には行くもんかと、深川中に言いふらして回まわっている……そう言い切きって、半吉はさらに袖そでをまくり上げた。

「わけを知らねえ連中は勝手なことを言うが、(2)このままじゃあ健けん気けいに店みせを守まもつてるまつのさんが、あんまり可愛そ

うじゃねえか」

まつのさんの蒲焼きは素人仕事なんかじゃねえと、半吉は語気を強めた。

「焼き方がてえねえだから皮もおもてもカリカリなのに、身はふつくらしていいよう。たつぷり美味さが詰まってるあ」

女が焼いているから、ひとは色眼鏡で見てしまう。しかし素直な気持ちで味わえば、あんな蒲焼きは深川中を探しても食えないと分かるはずだ。

遠からず、まつのさんの焼いた蒲焼きは評判になると半吉は言い切った。

「おれの差しにケチをつけるめえに、冬木に飛んでけえって、おめえにはやんなきゃあならねえことがあるだろうがよ」

半吉の啖呵を、取り囲んだ連中がそうだ、そうだと囃し立てた。

他町の冬木町から押しかけてきながら神輿の担ぎ方には、年長者にも遠慮のない文句をつける清五郎。

そんなあり方が、宮元の担ぎ手の多くから反感を買っていたのだ。

③ 言い返す言葉に詰まった清五郎は、先にこぶしを振り上げた。そのこぶしで殴りかかる前に、半吉が頭突きを食わせた。

不意の突進をまともに受けた清五郎は、背中から地べたに倒れ込んだ。半吉はそのまま馬乗りになり、右手で清五郎の頬を張った。

二発目を張ろうとしたとき、右手を町内鳶のかしら雅五郎が掴んだ。

「祭はあさつてに迫ってるぜ」

雅五郎のひとことで、騒動は鎮まった。

*

「出がらしのからつ茶だけどき。一杯呑んで落ち着きなさいよ」

雅五郎の女房は、亭主が連れてきた清五郎に焙じ茶を供した。

熱々の焙じ茶は、強い湯気を立ち上らせている。茶請けには、やぐら下の菓子屋岡満津の辰巳八景最中が添えられていた。

かしらの女房から示された、情の厚みに富んだもてなし。

目一杯までささくれだっていた清五郎の性根が、じゅわつと音を立てて湿り始めていた。

「気が立ってるときは、甘いもんが効くぜ」

言うなり六尺男の雅五郎が、小さなもなかを口にした。その形につられて、清五郎も茶をすすする前にもなかを頬張った。

「うめえ……」

清五郎が漏らしたのは、世辞ではなく正味のつぶやきだった。④ 雅五郎の目に、強い光が宿された。

「うめえのは当たり前だ」

雅五郎は清五郎を見据えた。気性の荒い火消し人足も従わせる雅五郎の眼光である。清五郎はもなかを呑み込むと、湯呑みには手を伸ばさずに背筋を張った。

「仲町中が祭で浮かれていても、岡満津の親方は今日も朝から神輿には目もくれずに、うめえ餡を仕込んでる」

雅五郎は湯呑みの茶をすすった。ごくつと音がして、太い喉仏が動いた。

「うちの火消し連中も半分は宿に詰めているし、夜通し六人が代わりばんこで火の見やぐらにも上っている」

餡を拵える岡満津の親方も、鳶宿に詰めている若い者も、ひと一倍の祭好きだ……雅五郎は清五郎を見詰めたまま、茶をすすった。

「あんたが食ったもなかがうめえのは、岡満津さんが命がけで餡を拵えてるからだ」

湯呑みを膝元に置いた雅五郎は、I。六尺男は、座っていても大柄である。

清五郎も精一杯に背筋を張ったが、雅五郎には遠く及ばなかった。

「祭半纏を着てえなら、汚しちやあならねえ」

雅五郎のII。

「仕事は半端だが神輿は担ぎてえというのは、はな垂れ小僧にも嗤われる言い草だ。そんな半端野郎には、神輿の担ぎ方をあれこれ言うことはできねえ」

小さな声だが響きはいい。清五郎の身体の芯しんにまで届いたらしい。清五郎はびくつと体を震わせた。

「おめえさんが差しをどうこう言った建具屋の半公も、飛び抜けた神輿好きだが、あんたと違って半端仕事はやらねえ」

本祭の神輿を担ぐために、七月は一日も休みをとっていない。八月はすでに二度も夜鍋よなべ仕事をこなしていた。

「神輿には神様が乗っておいでだ」

雅五郎の III。

「肩をいれても恥ずかしくねえように、しつかり仕事をやりねえな」

「へい」

背筋を伸ばしたまま、清五郎はきつぱりと答えた。

「⑤了見違あいを勘弁してください」

詫わびた清五郎は、勢いよく立ち上がった。

「宿にけえって、仕事に身をいれやす」

下げたあたまを清五郎が上げたとき、雅五郎は IV。

「せつかく女房がくれた茶だ、ひと口すすってからけえりねえ」

「ありがとうござえやす」

座り直した清五郎は、湯気の立つ焙じ茶に口をつけた。

「うちのカミさんも焙じ茶をいれるのが自慢でやすが、これもまた滅法にうめえ……」

「なんでえ、それは」

雅五郎は V。

「殊勝に詫わびたと思ったら、おれの前でのろけようてえのか」

「へいっ」

清五郎はさらに強い返事をした。

くしゅん。

何町も離れたまねき通りで、まつのが可愛いくしやみをした。

(山本一力「祭半纏」による)

(注1) 四半刻——約三十分。

(注2) 瓜実顔——色白でやや面長のふっくらとした顔。

(注3) 宮元——神社のそばに位置する地区の呼び名で、ここでは仲町のこと。

(注4) 裏店の婆さん——「清五郎」が店番の手伝いを依頼した隣人。彼女に接客の経験はない。

(注5) 鳶——鳶職(建設業で高い所での作業を専門とする職人)のこと。火消し(消防団)も兼ねている。

線部①～③の語句のここでの意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

① 「鼻っ柱の強さで通っている」

- ア 見さかいなくすぐにけんかを売ることである
- イ 人の話をまともに取り合わないで冷たくあしらうことである
- ウ 目立ちたがり屋で人の気を引こうとすることである
- エ 勝ち気で自分の意見を主張して譲らないことである
- オ 他人を信用せず相手をまず疑ってかかることである

② 「ぞんざいな扱いをされた」

- ア 丁寧すぎてかえって嫌味に感じる対応をされた
- イ 苦情を避けるために巧妙な言い訳をされた
- ウ 法外な代金をむさぼり取られた
- エ 一切文句を言わせてもらえず高圧的にのしられた
- オ 粗雑で礼儀になっていない対応をされた

③ 「色眼鏡で見てしまう」

- ア 最新の流行だからとそれに乗ってしまう
- イ おもしろがつてうわさ話のたねになってしまう
- ウ 思いこみや偏見によって物事を判断してしまう
- エ 真剣さのあまり周囲が見えなくなってしまう
- オ 話の裏を読んで隠し事を暴き出してしまふ

問2

——線部①「おめえが松乃井の入り婿野郎か」とあるが、そのように言った「半吉」とその言葉に対する「清五郎」の反応を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 「半吉」は、家業をおろそかにして祭りにうつつを抜かしているといううわさの「清五郎」を目の当たりにして馬鹿にしており、「清五郎」は一番触れられたくない「入り婿」という部分を突かれて腹を立てている。

イ 「半吉」は、家の中ではおとなしい「清五郎」が、隣町の神輿のありかたに生意気にも因縁をつけてきたことに腹を立てており、「清五郎」は初対面なのに「入り婿」という言い方をされて不愉快になっている。

ウ 「半吉」は、「清五郎」の大きな体が神輿の邪魔になっていることにも気づかずえらそうに指図してきたことを指摘する機会を狙っており、「清五郎」は「入り婿」という言葉が耳に入って逆上している。

エ 「半吉」は、「清五郎」が妻の目がないところではえらそうに、調子に乗って場違いな盛り上がり方をしているのを苦々しく思っており、「清五郎」は「入り婿」という事実を知られていたことにうろたえている。

オ 「半吉」は、「清五郎」がしがらない店の入り婿という肩身の狭さを、隣町まで出張ってきて発散するしかないことを憐れんでおり、「清五郎」は事実ではないというわさについて問い詰めようとしている。

問3

——線部②「このままじゃあ健気に店を守ってるまつのが、あんまり可愛そうじゃねえか」とあるが、そのように「半吉」が言うのは「まつのがどのような状況に置かれているからか、わかりやすく説明せよ。

問 4

——線部③「言い返す言葉に詰まった清五郎は、先にこぶしを振り上げた」とあるが、「清五郎」がそのような行動をとった理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 周囲にいる人々も自分に対して「半吉」と同じ評価を下しており、集団で馬鹿にされていると感じたから。
- イ 神輿の担ぎ方ではなく家業という想定外の方向から自分の行動を責められ、反論の余地がなかったから。
- ウ 祭りが好きでたまらないという自分の気持ちや神輿の担ぎ方へのこだわりをわかってもらえなかったから。
- エ 口べたな職人同士がいくら話し合っても無駄なことだとあきらめたから。
- オ 人の苦勞も知らないで知った風な口をきく若造は殴ってわからせるしかないと決心したから。

問 5

——線部④「雅五郎の目に、強い光が宿された」とあるが、この時の「雅五郎」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 職人の仕事ぶりを一口食べただけで判別した「清五郎」は、実は卓越した真のうなぎ職人だと確信している。
- イ 自分がすすめるままに甘いものを口にする「清五郎」は、自分には気を許しているらしいと自信をもっている。
- ウ もなかの味がわかった「清五郎」は、これから自分が話す内容を理解できる人間であるはずだと見込んでいる。
- エ 挨拶も詫びもなしにもなかを口にする「清五郎」は、自分の言い方一つで感化できる幼いやつだと見抜いている。
- オ こんな小さなもなかでも喜んで「清五郎」の普段の暮らしが、かなり苦しいものであることを実感している。

問 6

本文中の **I** **V** に当てはまる最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を重複して使用するのは不可とする。

- ア わざと目を尖らせた
- イ 目の光が、さらに強まった
- ウ 背筋を伸ばした
- エ 目をゆるめた
- オ 口調が変わっていた

線部⑤「了見違い」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 祭りの花形は神輿を担ぐ者であるが、商いをしている者たちは、祭りのときでも町の人々のために店を開け、黙って普段の仕事を続けるのが常である。自分は神輿を担ぐという華やかさを好んで、祭りを支える裏方の仕事の大切さに気づいていなかったことを「了見違い」と言っている。

イ 町中の人々はみんなひと一倍の祭り好きだが、仕事を半端にしていない。だから祭りのあり方や神輿の担ぎ方に文句が言える。一生懸命仕事をして役割を果たしているからこそ文句が言えるということを理解していなかったから「了見違い」と言っている。

ウ 町中が祭りで浮かれていても、黙って自分の仕事をし続けている人や、休みも取らず仕事を片付け、その上で神輿を担ごうとしている人がいる。その一方で、自分は神輿を担ぐことにばかり気を取られ、仕事を放り出していた。そのわきまへのなさを「了見違い」と言っている。

エ 本祭の神輿を担ぐためには、夜鍋仕事をしたり、休みをとらずに仕事をしたりしなければならぬ。他の人々がどんなに精進して神様が乗る神輿を担いでいるかを知り、その厳しいしきたりに圧倒され、自分の甘さを痛感した。その身の程知らずを「了見違い」と言っている。

オ 祭りや神輿担ぎは非日常であり、その非日常を楽しむために日常の暮らしがある。日常で最も大切にすべきは家族であるが、自分は家族の幸せを顧みることなく負担だけ強いて、非日常を追い求める自分を支えるのが家族だと思っていた。その勘違いを「了見違い」と言っている。

三

次の文章は、「世心(注1)つける女」が「なんとかして情けの深い男に逢うことができるようになりたいものだ」とこいねがう場面から始まる。よく読んで、後の問いに答えよ。

むかし、世心(注2)つける女、いかで心なさけあらむ男にあひ得てしがなと思へど、いひいでむもたよりなさに、①まことならぬ夢がたりをす。子三人(注3)を呼びて語りけり。ふたりの子は、なさけなくいらへてやみぬ。三郎(注4)なりける子なむ、「よき御男ぞいで来む」とあはするに、この女、②けしきいとよし。③こと人はいとなさけなし、いかでこの在五中(注5)将にあはせてしがなと思ふ心あり。狩し歩(注6)きけるにいきあひて、道にて馬の口をとりて、④「かうかうなむ思ふ」といひければ、あはれがりて、来て寝(注7)にけり。さてのち、男見えざりければ、女、男の家にいきてかいまみけるを、男ほのかに見て、

百年(注8)に一年(注9)たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ

とて、いで立つけしきを見て、うばら、からたちにかかりて、家(注10)にきてうちふせり。男、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女嘆(注11)きて寝とて、

さむしろに衣(注12)かたしき今宵(注13)もや ⑤恋(注14)しき人にあはでのみ寝(注15)む

とよみけるを、男、あはれと思ひて、その夜(注16)は寝にけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

(『伊勢物語』第六十三段による)

(注1) 世心——異性を恋う心。

(注2) 夢がたり——見た夢を語ること。その夢の意味するところを、人に解釈させるためにする。

(注3) あはする——夢解きをする。

(注4) 在五中将——在原業平ありわらのなりひらのこと。当時、屈指の風流貴公子で有名であった。

(注5) 百年に一年たらぬつくも髪——「ひどく年をとったおばあさん」を表す。

(注6) うばら、からたちにかかりて——「うばら」「からたち」は、ともにとげが多い植物。それらに引っかかるのもかまわずに、の意。

問1 ——線部①「まことならぬ夢がたりをす」とあるが、女はなぜこのようなことをしたのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 願いをかなえるために自分の思いを周囲に告げたかったが、言い出すきっかけがなかったから。

イ 周囲に情けの深い男がいなかったので、せめて夢の中で理想の男性像を作りたかったから。

ウ 夢の中でさえ、思うような情けの深い男に逢うことができず、自暴自棄になったから。

エ 自分の思いを周囲に告げたものの頼りにならず、夢のお告げの体ていを取ろうとしたから。

オ 夢で見た、情けの深い男と逢う方法は信用ならず、周囲に改めて尋ねようとしたから。

問2 ——線部②「けしき」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 計画 イ 機嫌 ウ 都合 エ 風景 オ 容貌

問3

——線部③「こと人はいとなまきけなし」とは「三郎」の思いであるが、その思いはどのようなものか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 兄二人はとても薄情で、自分だけが人情に厚い。
- イ 世の人は無粋で、在五中将こそが最も情け深い人だ。
- ウ 実の子であろうと他人であろうと、風情を解さない。
- エ 自分の母は、世の女たちと違って恋愛の機微が分かる。
- オ あらゆる生き物の中で、人間は特につれないものだ。

問4

——線部④『「かうかうなむ思ふ」といひければ」とあるが、誰に、どのようなことを言っているのか、その説明である次の文の空欄に適当な言葉を入れよ。ただしAは、最も適当なものを後の選択肢から選び、記号で答えよ。

A

に、

B

と言っている。

- ア 世心つける女
- イ 三郎
- ウ ふたりの兄
- エ 在五中将

問 5

——線部⑤「恋しき人にあはでのみ寝む」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 恋しい男と気があわなくても、平気で寝るのだろう。
- イ 恋しい男に逢った興奮で寝ることはできないだろう。
- ウ 恋しい男に逢わないで一人で寝ることになるのだろうか。
- エ 恋しい男にぴったりと寄り添って寝ることになるだろう。
- オ 恋しい男に不似合いなままで寝ることになるのだろうか。

問 6

この文章で「在五中将」はどのような人物として描かれているか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 自分の中では恋愛の対象かどうかの一線はあるが、それを人には見せない気遣いのできる人物。
- イ 自分を慕う女の悪口を平気で言える割には、すぐに切り替えができる器用な人物。
- ウ 熱意にほだされれば、好きな女でなくても拒絶をすることがない優しい人物。
- エ どんな女でも差別せず恋愛の対象とできるばかりか、人の情に心が動く、当時の理想的な人物。
- オ 恋愛がからむと、相手が誰であろうと際限なく前に進もうとする積極的な人物。

問 7

『伊勢物語』は、平安時代の作品であるが、最も成立時期が近いのはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 万葉集
- イ 竹取物語
- ウ 平家物語
- エ 徒然草
- オ おくのほそ道